

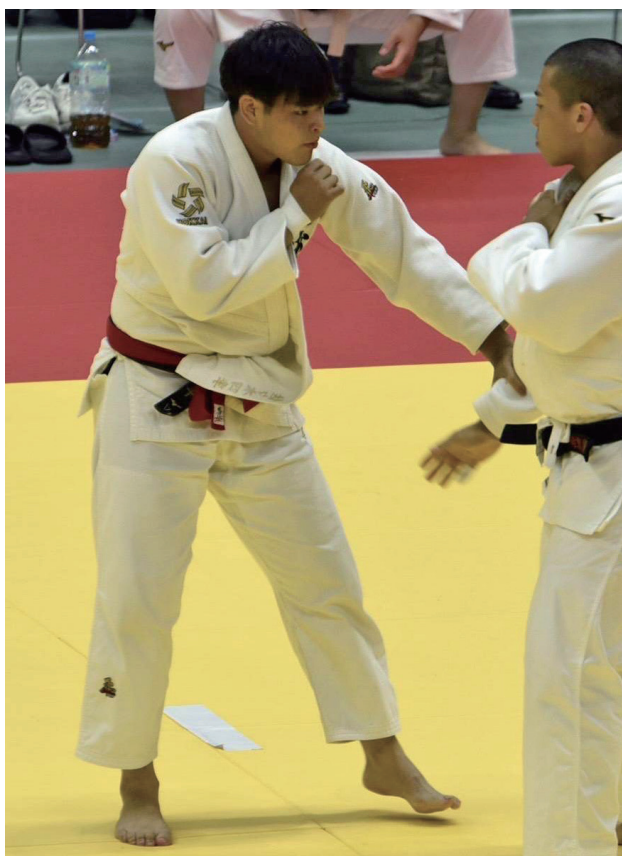
「実力差はそんなに感じなかった。でも、ちょっとしたところで相手の方が上でした」

8月8日、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の柔道競技大会個人戦男子90kg級。北海高校3年生の佐々木四季さんは、2回戦で柔道の強豪校である国士舘高校（東京都）の選手と対戦し、延長戦の末に敗れた。優勝候補だったその相手はその後3位に入賞。全国上位の選手と互角に渡り合ったからこそ感じたのは、大きな実力差ではなく「ちょっとした差」だった。

佐々木四季

ささき しき

2008年4月、白糠町生まれ。白糠学園卒業後、札幌市の北海高校に進学し全国大会等で活躍。北海道ジュニア柔道体重別選手権大会優勝。同大会における本町出身者の優勝は、越野忠則さん以来。



「悔しいです。そのちょっとした差を埋めていくしかない」

その視線は、すでに次の舞台へ向いている。

柔道を始めたのは幼い頃。きっかけは意外にも「自分からやりたかったわけではなく、親に入れられた」ことだった。それでも、初めて出場した大会で優勝したことで柔道が面白くなり、競技を続けてきた。

転機となったのは中学生のとき。全道中体連で3位に入賞し、そこで札幌のトップレベルの選手たちと親しくなった。

「その人たちと一緒に強くなりたいと思いました」

その思いを胸に、親元を離れ北海高校へ進学。寮生活を始めた。

当初は身の回りのことにも戸惑ったというが、仲間との共同生活を通じ、自分中心ではなく周囲を考えて行動することも学んだ。

学校が終わるとすぐ道場へ向かい、平日は夜9時、時には10時近くまで練習。土曜日と日曜日も柔道漬けの日々を送ってきた。

「高校に入って、仲間を大切にすることや、チームのために戦う心強さを学びました」

厳しい練習を乗り越えた3年間。インターハイ団体戦で北海高校は8年ぶりとなる全国大会ベスト8を達成し、仲間と戦う団体戦を良い形で終えることができた。

最後の舞台、日本一を目指し残す大舞台は9月の全日本ジュニア柔道体重別選手権大会。高校生活最後の大会となる。

目標を尋ねると、答えは迷いなく「日本一」。

「3年間いろいろな経験をさせてもらいました。最後の大会なので、勝っても負けても悔いが残らず、自分が出し切ったと思える試合がしたい」

白糠を離れ、家族と離れて過ごした3年間を振り返り、強く感じていることもある。

「一人じゃないということです。親がいて、寮の仲間がいて、先生や監督がいる。視野を広げてみたら、全然一人じゃない」

白糠の柔道少年は今、全国の舞台で日本一を目指す選手になった。

「今は結果が出ないことがあっても、諦めずに頑張っていれば、いろいろな道が開けると思う。めげずに頑張してほしい」

白糠で柔道に励む後輩たちへ贈ったその言葉は、佐々木さん自身が歩んできた道そのものでもある。

「最後の大会なので、勝っても負けても悔いが残らず、自分が出し切ったと思える試合がしたい。」